

小論文

(教養学部)

令和七年度 【後期日程】

問題冊子 一、三ページ

答案用紙 一枚

下書き用紙 一枚

注意事項

- 一 試験開始の合図があるまでこの問題冊子を開けてはいけない。
- 二 問題冊子や答案用紙の枚数の不足や、印刷に不鮮明なところがあれば申し出ること。
- 三 解答は必ず答案用紙の指定された箇所に入力すること。
- 四 受験番号は、答案用紙の所定の欄二箇所に入力すること。記入を忘れたり、あるいは誤った番号を記入した場合は失格となることがある。
- 五 退室するときは、問題冊子と下書き用紙を持ち帰ること。

問題 次に掲げる「移動という日常」から見えること」という文章を読んで、著者の見解について、あなたの考えを八〇〇字以上二二〇〇字以内で述べなさい。

小さな頃から、「自分はなんだか妙なところにいるなあ……」という感覚を持ち続けてきた。生まれたのは北海道の片田舎だが、冬はほぼ毎日氷点下（今日は0度だから暖かい）という感覚、桜が咲くのは5月も半ば、「焼肉」といったらジーンギスカンで、周囲で飛び交う言葉もテレビ番組とはずいぶん違っている。子供心にも、果たしてここは「ニッポン」なのか、そして自分は「ニホン人」なのかどうか、よくわからなくなっていた。やっと「本当のニッポン」（妄想）に行ける、と30年前に意気込んで出てきた京都だったが、言語・風習の壁を前にして自らの余所者感はいや増すばかり。そういえば、今は文学部の社会学教室に置かせてもらっているが、自分の専門はどちらかといえば人類学だし、そもそも大学に入った時は理系だったし……。こうしたデペイズマンの感覚（≪「ココジャナイ感」が、私の物の見方・考え方の基本にはあるような気がしている。

「[Todos somos migrantes! 我々はみな移民だ!」

そんな背景も関係しているのかもしれないが、ここ最近では中央アメリカ（特にグアテマラ・ホンジュラス・エルサルバドルの「中米北部三角地帯」[NCI]）からメキシコに流入・滞留する移民・難民たちと付き合うようになっていて。もともとは、メキシコ・中米における先住民運動やエスニシティの変容についての調査を行っていたのだが（これもまた、アイヌの地に闖入した植民者の末裔としての自意識があったからかもしれない）、10年ほど前、知り合いのツテでタバスコ州（グアテマラ・メキシコ南部国境地帯）にある移民支援施設を訪れたのがきっかけだった。そこは、一般にイメージされるような成人男性だけでなく、単身女性や未成年者・性的少数者、あるいは高齢者や持病持ちといった、多様な人々が「北」（≪アメリカ合衆国）を目指して集散する場だった。

メキシコから国境を越えて合衆国に「不法に」入国しようとする人の数は、新型コロナウイルス感染症や政治的変動により変化しつつも基本的には増加を続けており、2022年9月末時点での米墨国境地帯での拘束・送還者数は200万人を超えた。総人口およそ3300万人の「NCI」出身者は、そのうち実に50万人強を占めている。こうした人々の流れは、母国における過酷な治安状況や貧困によって生み出されるわけだが、感染症や気候変動といったグローバルなリスクもその大きな要因の一つとなっている。

メキシコは、こうした人々がトラックの荷台に潜み、貨物列車の天蓋にしがみつき、そして時には徒歩で通り抜けなければならない広大な試練の地、あるいは米墨国境の手前に引き伸ばされた縦深国境地帯として存在している。そして、ますます多くの人々がそれ以上の移動を諦め、あるいは阻止されて、メキシコ国内にとどまる生き方を模索するようになってい

る。2021年度に「メキシコ難民支援委員会 COMAR」が受理した難民・滞在申請は9万件以上。そこには「NGCのほか、ハイチ・キューバといったカリブの島国や南米からとりあえずはメキシコに逃れてきた人々も多く含まれている。

当初はゴールとして想定していた合衆国ではなく、単なる移動経路でしかなかったはずの地で新たな生の可能性を探ろうとした移民・難民たちの存在は、私のどこかを強く揺さぶり続ける。冒頭の「[Todos somos migrantes] は、メキシコにおける移民支援運動の一つの言葉である。人間はだれしもが、何らかの意味で移動の途中にある。そしてまた、この不確定な世界においては、だれしもが何らかのきっかけで移動の生を送る存在に転化しうるということを、この言葉は端的に示している。そしてまた、私も（ということとは、あなたも）現実態／可能態としてのそうした移民の一人なのだ。

難民に「なる」ということ…自己変容の場としての移動空間

北への移動を中止し、難民資格や人道ビザの取得を選択するこうした人々は、自らを「難民」として定義し直すことになる。メキシコ全土に張り巡らされた移動と支援のネットワークを経由するなかで、あるいは犯罪集団や警察・入国管理局、そしてしばしば民間人による暴力や収奪を経験するなかで、移民というよりはむしろ難民として自己を書き換える可能性が見いだされるようになる。定期的に COMAR に出頭し自らの背景と経験を語りなおし続ける過程で、本国におけるそうした悲惨な生活や暴力・差別・抑圧の記憶は、メキシコにおける新たな生を可能にするための「資源」へとその意味を変えてゆく。近親者の死・失踪や自らの身体に刻まれた傷痕・さまざまな心的外傷が、困窮と暴力（この両者は解き難く結びついている）のありさまをなによりも雄弁に証しだてる。

難民に「なる」ことは、しかし、決して安定で一貫した存在を保証するわけではない。中米人に対する根強い差別が充溢するこの地においてもまた、彼ら／彼女らは日常的な抑圧に直面する。ステイグマ化されたエスニシティを持つことに加え、経済的・制度的弱者であること、女性であること、性的少数者であること、こうした要件は、仮寓の地におけるまたとない収奪の「資源」としての意味も持つ。犯罪組織の使い捨て可能な手下として、あるいはどの低賃金労働者として、違法な性産業従事者として、そして常態化した嘲りや「ぼったくり」の対象として、難民たちは生き抜くことをしばしば余儀なくされる。

移動先においてもある意味で変わらない悲惨な日常のなかで、多くは難民を「やめる」「こ」とを選択／余儀なくさせられる。煩雑でいつ終わるとも知れぬ申請手続きを放棄し（事実、手続きを完了するのは申請者の3割ほどである）、再び北への絶望的な移動を再開する者、母国へ密かに帰還する者、そしてどの地にも存在しない「失踪者 [desaparecidos]」となる者。移民／難民たちにとって、メキシコという移動空間はこうした不断の自己検証と自己変容の場でもある。

p.s. 不定な「安定したわたしたち」

以上、私の研究対象を概観するかたちで現代世界における移動の現状の一面を説明してきた。あまりにも気軽に使われる一方で（帰宅難民、ランチ難民、ギガ難民…）、あるいはそれだからこそ全く異質で無関係の存在のように想定されがちな難民たちの不定な生に目を向けることで、「わたしたち」の存在もまた言うほど安定した、一貫したものではないことに気が付かされはしないだろうか。

社会学は、反省的な近代の「自意識」として生まれた側面があるが、一見して疎遠な対象の生活世界を経由して、多様な存在でありうるはずの「わたしたち」の存立基盤の構造を検証する作業の一端として日々の調査研究に取り組んでいるつもりではある。

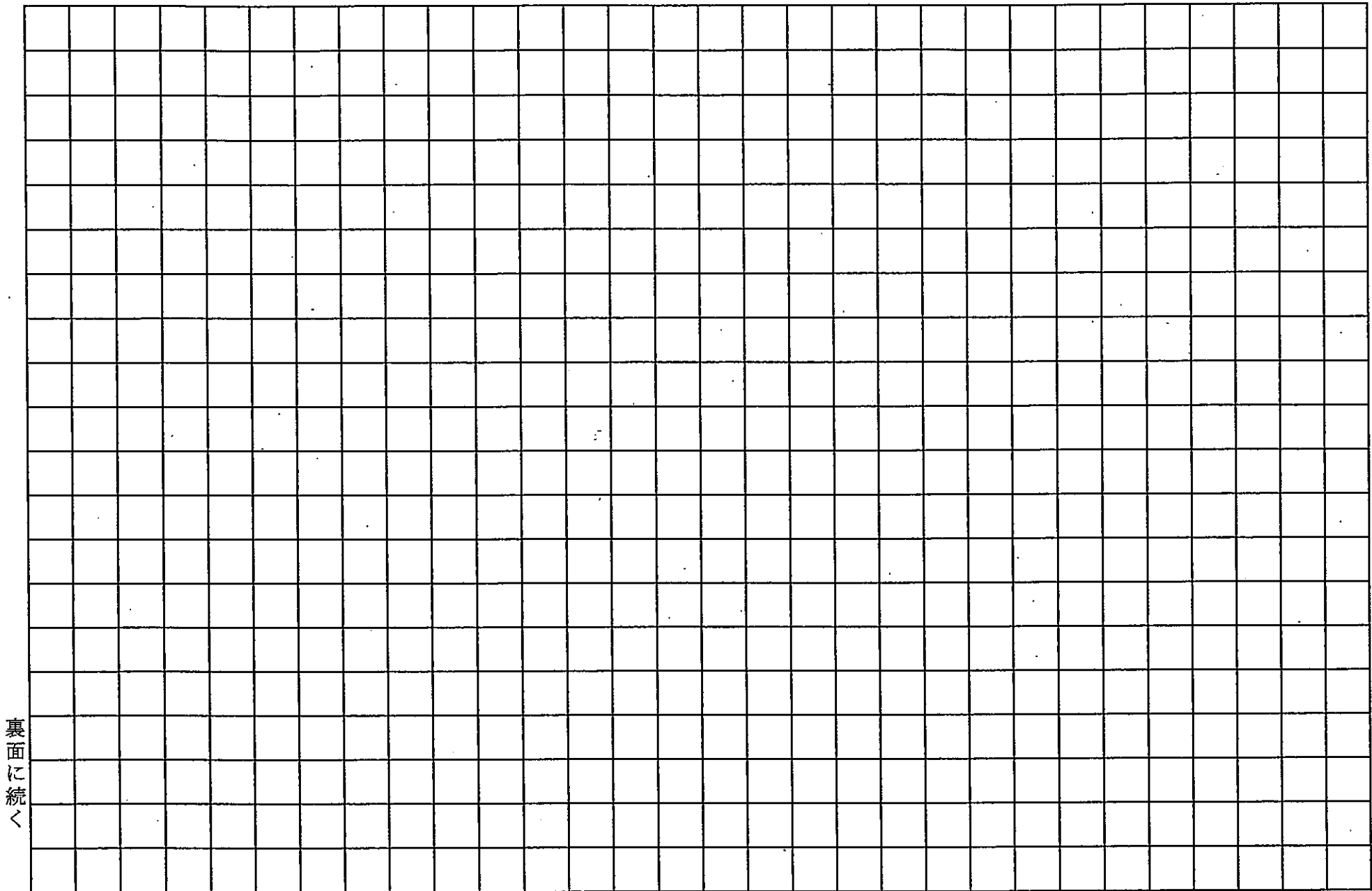
（佐々木祐「移動という日常」から見えること」神戸大学大学院人文学研究科編『人文学を解き放つ』神戸大学出版会 二〇二三年、より一部改変）

答案用紙 小論文 (教養学部)

- ① 解答する前に、下の受験番号記入欄(2箇所)に受験番号を正しく丁寧に記入すること。
- ② ※印欄には記入しないこと。

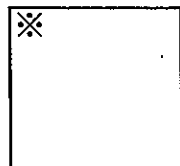
受験番号
.....

受験番号
.....



裏面に続く

600 400 200



下書き用紙